

A review and inquiry into the comments on the *Chuke Wuzhong Chuanqi* 初刻五種伝奇 (Five traditional dramas: first series) — focusing on those with “*Miao* 妙”

Keren Fan

Abstract

During the *Wanli* 万曆 period of the *Ming* 明 Dynasty, a book shop called “*Rongyu Tang* 容与堂” in Hangzhou published five traditional dramas: *The Romance of the Western Chamber* 西廂記, *The Tale of the Lute* 琵琶記, *The Story of Hongfu* 紅払記, *The Tale of a Jade Box* 玉合記, *The Secluded Boudoir* 幽閨記, and a vernacular novel *The Story of Water Margin* 水滸伝. All these six works contain *Li Zhuowu* 李卓吾's comments.

Scholars have different views on whether the comments in the above six works come from *Li Zhuowu* himself. By analyzing the content which received the most frequently occurring short comment “*Miao* 妙 (wonderful)” in the above six works, I find that the “*Miao*” used in the five dramas is mainly used to evaluate the description of lovesickness and love between men and women. However, the critiqued content with the large number of “*Miao*” comments also contains other types of descriptions. In this regard, the description of “*Miao*” in *The Story of Water Margin* is different from that of the five operas. This situation is also seen in the content which received another common comment “*Hua* 画 (vivid)”. In addition, I notice that in some scenes, it is difficult to distinguish between the criteria applied for “*Miao*” and “*Hua*”. Given the contradictions in the comments, I believe that the comments in the above six works published by *Rong Yutang* were likely to be written by more than one person. It is difficult to distinguish between the use of “*Miao*” and “*Hua*” because the booksellers at that time added these comments to pander to *Li Zhuowu*'s views and enhance the elements of *Li Zhuowu*'s criticism.

『初刻五種伝奇』における評語について —「妙」を中心に—

樊 可 人

はじめに

明代の万暦年間（1573～1620）、杭州にある「容与堂」という書坊が小説の『水滸伝』、戯曲の『西廂記』『琵琶記』『紅払記』『幽閨記』『玉合記』という六つの作品を刊行したが、これらの作品すべてに思想家である李卓吾（1527～1602）の批評が付されていることで「李卓吾先生批評○○○」という書名になっている。売れ行きが好調であったためか、その後前述した戯曲作品の版面の作りによく似た同種類の作品がさらに十数種刊行された¹⁾。刊行の先後順によって、『西廂記』『琵琶記』『紅払記』『幽閨記』『玉合記』は「初刻」された作品群とされ、のちに刊行された十の戯曲作品は「二刻」「三刻」に分類される²⁾。なお、以下本稿では便宜上「初刻」とされている五つの作品を『初刻五種伝奇』と呼ぶ。個別の作品に言及する場合、前文のように「李卓吾先生批評」を省略して呼ぶことにする。

「李卓吾先生」の名を冠したこれらの作品に見られる批評は「好」「妙」

1) のちに出版されたこれらの戯曲作品が容与堂刊であるかどうかは定かでない。廣澤裕介「明末江南における李卓吾批評白話小説の出版」（『未名』第24号、中文研究会、2006）、上原究一「虎林容与堂の小説・戯曲刊本とその覆刻本について」（『アジア遊学218 中国古典小説研究の未来：21世紀への回顧と展望』、勉誠出版、2018）を参照。

2) 張文恒「万暦刊本『三刻五種伝奇』考略」（『文化遺産』2014年第6期、『文化遺産』編輯部）を参照。

「趣」「眞」「画」などの一字の眉批・旁批から數十字の眉批・総批まで豊富な形式を用い、批判的な態度で作品の内容面を評価することに力点を置いている。その独特的な批評ぶりや評語の内容は湯顯祖（1550～1616）、陳繼儒（1558～1639）などの名士の名を冠した批評付きの戯曲作品に多く借用された³⁾。また、これらの「李卓吾先生」の批評には、眞に迫った描写を推賞する一方、物語の筋立てを重視する視点も窺われ、清代に入っても、金聖嘆（1608～1661）をはじめとする批評家にまで影響を与えた⁴⁾。

「李卓吾先生」が批評した小説と戯曲に見られる批評は後世の作品や評論家に多大な影響を与えたため、しばしば研究対象として取り上げられ考察されてきたが、版本研究や批評者問題（果たして李卓吾本人が批評を付けたか否か）を論述するために、數十字の眉批・総批だけを主要な考察対象とした先行研究がほとんどであった。しかし、これらの作品に頻繁に使われた批評は比較的に長い眉批・総批ではなく、行間や眉欄といった本文と緊密に関わるところに付けられる一、二文字の短評である。それらの短評には批評者の考えが物語の展開に添って隨時に反映されていると考えられる。

川島優子氏が容与堂刊『李卓吾先生批評忠義水滸伝』（以下、「容本『水滸』」と呼ぶ）における批評に対して考察を行ったところ、最も多く用いられている一文字の批評は「画」（373個）であり、「妙」（308個）、「是」（172個）、「佛」（103個）、「趣」（52個）、「眞」（32個）などがそれに次ぐ。また、「画」は「英雄たちの勇ましい描写には見られず、脇役である小人

3) 蒋星煜『西廂記の文献学研究』（上海古籍出版社、1997）所収の「李卓吾批本『西廂記』の特征、真偽与影响」「湯顯祖評本『西廂記』是偽装的李卓吾本」「明容与堂刊本李卓吾『西廂記』対孫月峰本、魏仲雪本之影响」「陳眉公評本『西廂記』的学术価値」、朱万曙『明代戯曲評点研究』（安徽教育出版社、2004）第三章第一節「『李評』系統」などがこの問題について詳しく述べている。

4) 馬成生「從李卓吾到金聖嘆—略論李評『水滸』与金評『水滸』在思想方面的繼承關係」（『杭川師院学報（社会科学版）』1982年第3期）、竹下咲子「金聖歎批評の源流を探る一百二十回本『水滸伝』李卓吾批評を中心に」（『和漢語文研究』第7号、京都府立大学国中文学会、2009）などに詳しい。

物たちの描写に対して付される」傾向があったことが氏の研究によって明らかになった⁵⁾。これに対し、筆者が『初刻五種伝奇』に見られる評語に対して考察を行ったところ⁶⁾、最も使われている一文字の批評は「妙」であった。作品によって「妙」と「画」の付け方に微妙な違いがあるものの、共通する部分もあるように思われる。

そこで、まず『初刻五種伝奇』における「妙」を中心に分析を進め、これらの評語がどのような内容に付けられているのか、そこには批評者のどのような考えが反映されているのか、といった問題を容本『水滸』における「妙」と「画」と比較しつつ、考えてみたい。

一、『幽閨記』における「妙」

まず、『初刻五種伝奇』における「妙」の使用状況を具体的に見てみよう。

一文字の「妙」の批評は合わせて 103 個確認でき、『幽閨記』(3)、『琵琶記』(10)、『玉合記』(11)、『紅払記』(20)、『西廂記』(59) という昇順に並べることができる。

二文字の「妙妙」の批評は「妙」の連用とも見なすことができるが、とりあえず一つの独立した分類にする。これらの「妙妙」は合わせて 49 個確認でき、『琵琶記』(1)、『紅払記』(1)、『玉合記』(2)、『幽閨記』(6)、

5) 川島優子「容与堂刊『李卓吾先生批評忠義水滸伝』の評語に関する考察—『画』を中心として—」(『東方学』第 136 輯、東方学会、2018)。後、同氏『『金瓶梅』の構想とその受容』(研文出版、2019) にも収録。

6) 本稿では、宮内庁書陵部所蔵の『李卓吾先生批評北西廂記』、『古本戯曲叢刊初集』(国家図書館出版社、2016) 所収の『李卓吾先生批評琵琶記』、『李卓吾先生批評幽閨記』、『李卓吾先生批評玉合記』及び中華再造善本『李卓吾先生批評紅払記』(国家図書館出版社、2011) を用いる。なお、作品ごとに複数の版があり、版によって誤刻などによる文字の異同が存在する。上原究一「虎林容与堂の小説・戯曲刊本とその覆刻本について」(前掲注 1 論文)、黄冬柏「宮内庁書陵部所蔵の容与堂本『西廂記』考—中国国家図書館蔵本との比較考察—」(『九州中国学会報』第 59 卷、九州中国学会、2021) に詳しい。

『西廂記』(39) という昇順に並べることができる。

さらに、「曲妙」「妙甚」「過接得妙」「嬌態如画、妙妙。」のように、「妙」や「妙妙」がほかの言葉と組み合わせて用いられている批評は合わせて 80 条確認でき、『玉合記』(4)、『幽闇記』(13)、『紅払記』(14)、『琵琶記』(22)、『西廂記』(27) という昇順に並べることができる。

「好」「画」の使用回数は「妙」に次ぐが、一文字の批評として、それぞれ 23 個と 22 個しか確認できず、いずれも「妙」の約五分の一しかない。また、二文字の「好好」「画画」もそれぞれ 2 個と 8 個しかなく⁷⁾、「妙妙」と比べて遙かに少ない。なお、以上の統計には総批に該当する例は含まれていない。

以上の数字を見ると、『初刻五種伝奇』と容本『水滸』は「妙」が多用されているのが共通の特徴だと言えよう。しかし、前述したように、作品によって「妙」と批評されている内容が他作とは異なる場合がある。

「妙」の数が最も少ない『幽闇記』から見てみよう。

『幽闇記』は金国兵部尚書の娘である王瑞蘭と書生の蔣世隆の悲歡離合を描く戯曲である。父が戦争の前線に行き、故郷に残された瑞蘭と母は、戦火を逃れる途中離れ離れになった。瑞蘭は戦乱で妹と離散した世隆と夫婦を装いながら逃亡した。一方、世隆の妹の瑞蓮は瑞蘭の母親と出会い、二人は義理の親子関係を結んだ。幾多の曲折を経て、瑞蘭は世隆と相思相愛の仲になったが、父と再会を果たした後、世隆との関係が父に認められず、強引に連れ戻された。ある夜、月の下で世隆への思いを述べる瑞蘭の声を、瑞蘭一家と一緒に暮らす瑞蓮が盗み聞いたことで、お互いの関係が明らかになった。その後、世隆と彼の義兄弟である陀満興福は見事科挙に及第し、それぞれ瑞蘭、瑞蓮とめでたく結婚した。

7) なお、『西廂記』第十齣「尾声」曲の後に続く張生の科白に対する眉批に「画画、画亦不到此。」とある。こちらの「画画」は単独に使われる例ではないため、8 例には含めていない。

同書の中で、「妙」の使用はそれぞれ第二十二齣と第三十二齣に確認できる。

まず、第二十二齣の「妙」は宿屋の主人が世隆と同じ部屋に泊まることを拒む瑞蘭を慰め、道理を説いて彼女を納得させる場面で、「不若反経行權、成就了好事罷。(今の情勢を鑑み、めでたいことを成し遂げたほうがよい。)」と世隆と瑞蘭の成婚を勧める科白に付されている⁸⁾。

第三十二齣に見られる二つの「妙」はともに「二郎神」曲において小旦の瑞蓮が歌う曲文に付されている。世隆への思いを打ち明ける瑞蘭の言葉を盗み聞いた瑞蓮は「悄悄輕將衣袂拽。(こっそりと袖を軽く引っ張つた)」後、瑞蘭に「却不道小鬼頭春心動也。(なんとおちびちゃんの恋心が動いたわ。)」と脅かし、瑞蘭の父に告げ口しようとするふりをすることで、世隆の情報を詳しく吐かせ、世隆に対する愛情を確認できた。「妙」は上の「悄悄」の句と「却不道」の句にそれぞれ付されている。

以上の三つの「妙」はいずれも登場人物が知恵を働かせ、男女主人公のお互いへの恋愛感情を高めさせる言葉に付されている。

一方、「妙妙」は第二十五齣、第二十六齣、第三十二齣に確認できる。

まず、第二十五齣の「妙妙」は「豆葉黃」曲と「前腔(川撥棹)」曲において旦の瑞蘭が歌う曲文を批評するために用いられている。前者は父の質問に対する瑞蘭の「我隨着個秀……(私は秀……についている。)」という答えに旁批として付され、後者は瑞蘭が父に強引に連れ戻された際、病を患っている世隆に伝えた「男児贖薬、把衣衫典當償。我不能穀覗、我不能穀覗得爾身體康。(あなたは服を抵当に入れて薬を買ってください。私はもうあなたの回復を見届けることができません。)」という情を込めた言葉に眉批として付されている。

8) こここの「妙」は眉批であるが、対応している箇所は本文中の引用である。なお、以下特に説明がない限り、引用する原文にはもともと園点(○)が付いている。

次に、第二十六齣に見られる「妙妙」はそれぞれ「紅衫児」曲と「会何陽」曲に付されている。前者には眉批としての「妙妙」が二つ確認でき、一つは瑞蘭が父に強引に連れ戻された話を再会した母に伝えようとし、「我有一言説不尽。(私には語り尽くせない話があります。)」と述べて母の態度を探る一文に、もう一つは瑞蘭の父が妻にその話を追及させないように発した「爾休只管叨叨問。(おまえはひたすら耳を傾けるのをやめなさい。)」という一文に付されている。後者の「会何陽」曲は前者の「紅衫児」曲のすぐ後ろに来る一曲である。父によって訴える先を無くした瑞蘭は「甚時除得我心頭悶。甚日除得我心頭恨。(いつになったら、私の心の憂さを晴らすことができるのか。いつになったら、私の心の恨みを晴らすことができるのか。)」と憤慨する。この二句に対して、眉欄に「妙妙」が付されている。

また、第三十二齣における「妙妙」は瑞蓮の「如今還思量着我哥哥麼。(今でもまだ兄のことを想っているの。)」という質問に対する瑞蘭の答え「思量起痛辛酸。那其間他染病耽疾。(想い出すと、辛くて心が痛い。あの時、彼は病に罹っていた。)」に眉批として付されている。

このほか、一見しただけでは「妙」の理由がはっきり解らない「曲妙」「意味光景都妙」の眉批が存在する。例えば、第二十六齣の「鑾江令」曲は瑞蘭の母と瑞蓮が逃亡する途中、早く家族と再会できることを祈る曲文に「曲妙」が、第三十二齣の「青衲襖」曲は瑞蘭が暮春の景色に触れて、世隆と離れ離れになった悲しい感情が湧いてくる曲文に「曲妙」が、同齣の「前腔(四犯黃鶯児)」曲は瑞蘭と瑞蓮が世隆のことを心配し、いつか再会できるよう祈る曲文に「意味光景都妙」が付されている。

以上のように、第二十六齣の「紅衫児」曲における瑞蘭の父の発言を除き、『幽閨記』に見られる「妙」は主に愛する人を想う気持ち、再会したい気持ちまたはその気持ちを高めさせる行動を批評するために使われてい

る。

そして、『幽閨記』と最も類似する視点で「妙」が付される作品は『玉合記』である。

二、『玉合記』における「妙」

唐の伝奇小説「柳氏伝」の物語に基づいて作られた『玉合記』は才子の韓翃と李王孫家の名妓柳氏の悲歡離合を描く戯曲である。文名が高い韓翃は義俠心に富んだ李王孫に気に入られ、彼の好意によって、互いに慕い合う柳氏と結ばれた。まもなくして安史の乱が起こり、韓翃は節度使の侯希逸に誘われ、掌書記として遠方に赴任した。戦乱を逃れるため、柳氏は剃髪して尼僧になったが、安史の乱が鎮圧された後、権勢のある蕃将沙咤利に奪われた。幾多の曲折を経て、柳氏は許俊という者に奪還され、侯希逸の上奏によって皇帝より詔が下され、柳氏と韓翃はめでたく団円を迎えた。

同書の中で、眉批としての「妙」は第二齣と第七齣に一個ずつ、旁批としての「妙」は第七齣に五個、第九齣に三個、第十一齣に一個確認できる。

このうち、第二齣の「妙」を除き⁹⁾、ほかの「妙」はいずれも直接的あるいは間接的に男女主人公の互いに対する恋心を描く箇所に付されている。

第七齣の「妙」はお寺で韓翃に会った召使いの軽娥が帰ってきた後の、柳氏との会話に集中的に付されている。前日家の前に来た人が韓翃であることを軽娥が伝えると、柳氏は「早知是他。借杯茶与他也罷了（早く彼であることを知つていれば、お茶でもご馳走したのに。）」と答える。また、軽娥は韓翃が「再三問姐姐起居（何度もお嬢さまの情報を尋ねになりま

9) 第二齣の「妙」は韓翃が李王孫からよい馬を貰った後、いつか馬に乗って章台を散策しようと発した「章台晚出半籠鞭」（『琥珀猫兒墜』曲）という一文に付されている。第五齣では、韓翃は自分が歌つたことを実現し、章台に住んでいた女主人公の柳氏と会ったが、第二齣の時点で、韓翃と柳氏は未だ面識がない。そのため、第二齣の「妙」はほかの「妙」とは性質がやや異なると思われる。

した)」と伝えると、柳氏は「這丫頭。問我則甚。(この小娘。私のことを聞いてどうするの。)」と照れ隠しのために、敢えて冷たい態度を取る。さらに、軽娥が韓翃に頼まれて持つて帰った玉盒を柳氏に見せようすると、柳氏はまた「我也不要看他。(私は別に見たくない。)」と無関心なふりをする。以上の柳氏の答えにそれぞれ「妙」が付されており、この一段落の眉欄にも「妙」、「如画(絵のようである)」「喜処、驚処、恨処、種種画出。(喜ぶところ、驚くところ、悔しむところ、色々と描き出されている。)」が順番に付されている。その後、軽娥に韓翃との結婚を提案されると、柳氏は自分の身分が支障をきたしているため、どうすればよいかわからないという悩みの発言と「哎、這話也休提了。(ああ、この話はもうやめよう。)」という嘆きを発するのだが、この部分にそれぞれ「妙」が付されている。

第七齣の「妙」は軽娥とのやりとりによって表された柳氏の恋に対する喜びや不安に付されているのに対し、第九齣の「妙」は柳氏への恋心を隠せない韓翃の分かりやすさに付されている。韓翃は柳氏との仲を深めたいと思い悩んでおり、情報収集のためにやって来た軽娥が柳氏の考えを伝えようすると、すぐさま「愿聞(謹んでお聞きします。)」「一発見教。(更なるご教示を。)」を言う。この二言にそれぞれ「妙」が付されている。

また、軽娥から柳氏が自分の容姿を褒めていたことを聞くと、韓翃は「天生如此。(生まれつきこうでした。)」と自慢し、軽娥に「爾好不識誇(おだて文句がお分かりにならないのですね。)」と笑われる。ここの「妙」は軽娥の言葉に付されているが、意中の人の褒め言葉を聞いた後、有頂点になった韓翃の様子を間接的に批評していると考えられるだろう。

そして、第十一齣の「妙」は韓翃が宴に出席することを知った柳氏が軽娥に自分の身だしなみが整っているか確認する言葉(「前腔(一江風)」曲)に付されており、やはり恋心に関する表現である。

「妙」のほか、第十一齣の「妙妙」（「前腔（一江風）」曲）、第二十七齣の「妙妙」（「玉芙蓉」曲）、第九齣の「也妙」（「紅納襖」曲の直前にある軽娥の科白）はそれぞれ柳氏、韓翊、軽娥の言葉に付されているが、いずれも恋を成就するための努力や恋する相手を想う表現と関わっている。

三、『琵琶記』における「妙」

『幽闇記』と『玉合記』における「妙」が主に男女の恋愛感情をめぐる表現に付されているのに対し、『琵琶記』からは「人情を尽くす」または「伝神」の視点で「妙」を付す批評者の態度が窺える¹⁰⁾。

曲祖（魏良輔『曲律』）として評価される『琵琶記』は民間で扱われてきた蔡伯喈と趙五娘の物語に基づいて作られた戯曲である。五娘と新婚した蔡伯喈は父に科挙を受けるよう強く言われ、仕方がなく上京し、状元で及第した。そこで、権勢のある牛丞相に無理矢理に婿に選ばれ、牛府で牛氏と新婚生活を送った。一方、蔡伯喈の故郷は飢饉に遭い、五娘は厳酷な環境の中で舅と姑に孝養を尽くすも、二人が生き延びることはできなかつた。五娘は髪を売って二人を埋葬し、琵琶を弾き、物乞いをしながら蔡伯喈を探しに上京した。幾つかの困難を乗り越えた五娘は牛府にたどり着き、牛氏の同情と助けを得て、五娘は正妻となり、牛氏は第二夫人となって大団圓に終わる。

同書における「妙」は第二齣（2個）、第五齣（4個）、第二十五齣（1個）、第二十八齣（2個）、第三十五齣（1個）に確認できる。このうち、第二齣、第五齣の「妙」は旁批、第二十五齣、第二十八齣、第三十五齣の

10) 傅田あつ子氏は「容与堂本『幽闇記』と『琵琶記』の李卓吾評」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第9巻、お茶の水女子大学中国文学会、1990）において、李卓吾評では「平易な言葉で書かれているもの」を妙とする方向性であると指摘しているが、後文にも触れるように、『初刻五種伝奇』における「妙」を全体的に見渡せば、このような方向性は一定ではない。

「妙」は眉批として付されている。

第二齣の「妙」は五娘が家族との会食の場で、「持杯自覚嬌羞。(杯を持つと自ら恥じらう。)」(「錦堂月」曲) という曲文に、蔡婆が「惟愿取連理芳年、得早遂孫枝榮秀。(ただあなたたち二人の若い新婚さんが早く子を産んで子孫が繁栄することを願うばかり。)」(同曲) という曲文に付されている。

第五齣の「妙」はそれぞれ蔡伯喈が科挙を目指して旅立つ日に五娘が発した「教我如何不怨。(どうして怨まずにいられるだろうか。)」(「江水児」曲) という言葉と、蔡伯喈が五娘や親のことを思い、「如何教我割舍得眼睜睜。(どうしてそのまま捨て去ができるだろうか。)」(「犯尾序」曲) と五娘に返した言葉と、五娘は伯喈に及第したら早く帰るよう言い聞かせ、「我頻囑付、知他記否空自語惺惺。(私は何度も言い聞かせたけれど、彼は本当に覚えたかしらと虚しく独り言を発した。)」(同曲) と述べる部分に付されている¹¹⁾。

第二十五齣の「妙」は五娘が髪を売ろうとしたが、買い手が見つからず、絶望的な気持ちを歌う曲文(「香柳娘」曲)に、第二十八齣の二つの「妙」はともに牛氏と中秋の月をめでる蔡伯喈が両親と五娘を想う曲文「愁听、吹笛閑山、敲砧門巷、月中都是斷腸声。(閑山に吹く笛の音、巷に響く砧の音が悲しく聞こえ、月の夜には断腸の音のみ。)」(「念奴嬌序」曲)と「惟応、辺塞征人、深閨思婦、怪他偏向別離明。(ただ国境のとりでにいる兵士と深窓にいる人妻は、月が離れ離れの時により輝くことを怪しむだろう。)」(同曲) に付されている。

第三十五齣の「妙」は牛府に訪れた五娘が牛氏の態度を探るために、探している夫の名前を祭白諧と濁し、「人人都説道在牛府中廊下住、敢是夫人也知道。(人々は牛府に住んでいると言っていますが、奥様は恐らくご

11) 「我頻囑付、知他記否空自語惺惺」には二つの「妙」が付されている。

存知だと思います。)』と述べる科白に付されている。

以上の「妙」は『幽閨記』『玉合記』と同じく主に愛する人を想う気持ち、再会したい気持ちまたは家族の団円を実現させようとする努力に付されている。

一方、『琵琶記』における「妙妙」は一個だけ確認できるが、これは前引第二齣の蔡婆の「子孫繁栄」の願いに対し、父の蔡公が歌う「惟願取黃巻青灯、及早換金章紫綬。(ただお前が勉学に励み、早く高位高官に就くことを願うばかり。)」(同「錦堂月」曲) という曲文に眉批として付されている。蔡公の発言は家族の団円に反するが、「錦堂月」曲の終わりに夾批として「父願子得名、姑願媳得子、曲尽人情、妙絕妙絶。(父は子に功名を手に入れてほしく、姑は嫁に子を授かってほしく、曲が人情を描き尽くしており、絶妙である。)」とある。また、第二十九齣では、五娘が舅と姑の肖像を描く際に歌う舅と姑を悼む内容の「三仙橋」曲に、眉批として「二曲非但伝蔡公、蔡婆之神、并伝趙五娘之神矣。絶妙。(二曲は蔡公、蔡婆の様子を伝えただけでなく、趙五娘の様子も伝えたのである。絶妙である。)」「妙至此乎。(ここまで素晴らしいのか。)」が付されている。これらの批評から、「妙」が付される表現は批評者が考える「人情を尽くす」または「伝神」の箇所だと推測できる。実際に前引の第二十五齣の「香柳娘」曲はまさに人情を尽くしたか伝神のために、「妙」が付されていると考えられる。

以上の用例のほかに、『琵琶記』では、「妙甚」「白妙甚」「曲妙甚(甚妙、妙絶)」の批評が複数存在するが、批評の視点はやはり男女の恋愛感情に止まらない。

第五齣では旅立つ前の蔡伯喈に対し、五娘が「官人、爾如何割舍得便去了。(あなた、どうして私を捨て去ることができるというの。)」という科白に「妙甚」が付されているのはこれまで考察してきた「妙」の視点に合

致するが、第九齣の「風雲会四朝元」曲の「輕移蓮歩、堂前問舅姑。…苦、無人説与、這凄凄冷冷、怎生辜負。(忍び足で母屋の前に行き舅と姑に挨拶する。…苦しみを聞いてくれる人はおらず、このような寂しさの中で、あなたは何故私にそむけるのか。)」という一段落や第二十一齣の「孝順歌」曲の「糠和米、本是相依倚、…丈夫、傭便是米呵、…奴家恰便似糠呵、…怎的教奴、供膳得公婆甘旨。(糠と米はもともと依存し合うものであり、…あなたは米のような存在であり、…私は糠のような存在であり、私はどうして舅と姑によい食事を提供することができるだろうか。)」という一段落に対し、それぞれ「此曲甚妙、甚自在。不遜『西廂』『拝月』也。(この曲は甚だ素晴らしい、自在である。『西廂』『拝月』に劣らないのである。)」「曲妙甚、曲妙甚。曲至此、又可与『西廂』『拝月』兄弟矣。(曲は甚だ素晴らしい。ここまで至ると、また『西廂』『拝月』と伯仲できる。)」という眉批が付されている。内容から見ると、この二曲は五娘の蔡伯喈への思いが含まれてはいるが、夫がない間、一人で家庭を支える辛さを訴える要素がより大きいと思われる。

さらに、亡くなった舅と姑を埋葬する費用を稼ぐために、五娘が切った髪を売る場面を描く第二十五齣の「香羅帶」曲では、五娘が髪を切った辛さや生活に対する絶望を訴える曲文に対し、「曲妙」「曲妙絶」が眉批として付されており、五娘が土を運んで舅と姑を埋葬する場面を描く第二十七齣の「五更転」曲では、自分の苦しさを聞いてくれる相手がいない辛さを訴える曲文に対し、「曲妙甚」が眉批として付されているが、やはり男女の恋愛感情という視点とは異なる。

前述したように、『幽閨記』と『玉合記』においても「男女の恋愛感情」という主題以外の表現に付されている「妙」が存在するが、一、二例しか確認できない。これに対し、『琵琶記』では、「妙甚」「妙絶」のようなほかの言葉と組み合わせる「妙」が増えるにつれて、「妙」に対する批評の

視点が広がったと言えよう。

そして、このような状況は『紅払記』にも確認できる。

四、『紅払記』における「妙」

『紅払記』は唐の伝奇小説「虬髯客伝」の物語に基づき、孟棨『本事詩』に記されている楽昌公主の話を取り入れて作られた戯曲である。西京留守を務める楊素を訪れ、そのもとで才能を發揮することを望んでいた李靖は、紅払という楊府の侍女に気に入られて駆け落ちを提案されたため、彼女を連れて太原に向かった。途中、二人は義俠の張仲堅（虬髯客）に会い、紅払は張仲堅と義兄弟の契りを結んだ。太原で李世民に会った張仲堅は李と天下を奪い合うことを諦め、西京にある家財を李靖夫婦に贈り、海外に行き、のちに扶余國の国王になった。一方、陳が滅ぼされた後、楊素に贈られた陳の楽昌公主は戦争で離れ離れになった夫の徐徳言のことが忘れられなかつた。楊素の好意によって、楽昌公主は徐徳言と再び一緒になつた。李靖が李世民の帳下に身を寄せた後、西京に残された紅払は薛仁果が起こした反乱により、他所へ避難した。楽昌公主と徐徳言の住まいに偶然辿り着いた紅払は徐徳言に出仕するよう勧めた。李靖、徐徳言、張仲堅は李世民を助けて天下を平定した。三人及び紅払、楽昌公主はそれぞれ恩賞を与えられ、団円に終わる。

『紅払記』における様々な「妙」の批評は『琵琶記』と同様、主に男女の恋愛感情という主題に関わる表現（特に楽昌公主と徐徳言の愛情をめぐる表現）に相当数付されているものの、明らかにそれと関わりのない表現に付されている例も複数存在する。

まず、第十五齣「棋決雌雄（碁で勝敗を決める）」では、李靖、張仲堅、道士の徐洪客ら三人が李世民のもとを訪れた。作者は徐洪客と李世民の碁

の対局を通し、後者こそ天下を取る人であることをほのめかしている。そこで、李府を訪れた時、徐洪客は謀士の劉文静と李世民が碁を打つのを見て「諸君国器、何以此為。(お二人は国を治めるすぐれた能力がある方ですが、どうしてこのようなことをしておられるのですか。)」と尋ねると、劉文静はいくつかの碁の典故を挙げ、「先生不棄、就与公子少試国手如何。(もしお嫌でなければ、少し若君と切磋琢磨なさってはいかがでしょうか。)」と李世民との対局を誘った。徐洪客が発した質問と劉文静の「就与公子少試国手如何」にそれぞれ「妙」が付されている¹²⁾。また、同齣の「高陽台」曲では、小生の李世民が歌う「先着誰知（最初に〔勝利に〕辿り着く者は誰も知らない）」という一句と、淨の徐洪客が歌う「運奇点眼争国手、看指尖誰強誰怯（相手の意表を突く手を打つことで国手という位を争い、強弱は指先で決まる。）」という一句にそれぞれ「妙」が付されている。

また、第十三齣では、張仲堅と約束して太原に到着した徐洪客が「飄飄此身、燕齊秦晋。角巾布紳、資糧無甚。竜争虎鬪正紛紛、是誰能早定乾坤。（我が身は燕、齊、秦、晋の各地を転々とする。隠者で小物であるゆえ、資糧を多く持っていない。天下では、激しい鬭いがあちこちで起こっている、早く天下を平定できる者は誰だろう。）」（「双勧酒」曲）と歌い、眉欄には「文字到此自在極矣。妙妙。（文字はここまで至ると、自在の極みに達したのである。素晴らしい。）」とあり、第二十五齣では、薛仁果の軍隊が迫ってくる局面に対し、妓女が発した言葉「若遇了這伙殺人的軍兵、不輸似那般使水的子弟。（もしこの人殺しの兵卒たちに遇うと、遊客に負けないほどの酷い目に遭う。）」（「前腔（水底魚兒）曲」）に対し、眉批として「妙妙。使水的子弟真是殺人強盜（素晴らしい。遊客は誠に人殺しの強盜のような者である。）」が付されている。

12) 「就与公子少試国手如何」には圈点が付されていない。

以上に挙げた例は人情を尽くしたか伝神であるために「妙（妙妙）」が付されたのかはつきりしないが、『琵琶記』と同様、「妙」に対する批評の視点が広がったことが確認できる。

五、『西廂記』における「妙」

李卓吾本人が『西廂記』『水滸伝』を「古今至文（古今の極めて素晴らしい作品）」と高く評価したことがあるためか¹³⁾、『初刻五種伝奇』の中で『西廂記』に付された「妙」の数は最多を誇る。

『西廂記』は唐の伝奇小説「鶯鶯伝」の物語に基づき、張生と崔鶯鶯の恋を描く戯曲である。科挙に行く途中、気晴らしに普救寺を訪れた張生と、亡くなった元相国の父の柩を故郷に運ぶ途中、一時的にお寺に泊まった崔氏一家の娘の鶯鶯は惹かれ合い、鶯鶯の召使いの紅娘の助けのもとで、礼教の束縛を破って密会した。事が発覚した後、鶯鶯の母（以下、崔夫人）は科挙及第を結婚の条件にして張生を上京させた。張生は見事に及第したが、鄭恒という鶯鶯の元婚約者は張生が別の女性と結婚したと嘘をつき、鶯鶯を横取りしようとした。しかし、鄭恒の嘘が結局見破られ、張生と鶯鶯はめでたく結婚した。

一文字の「妙」が付されている箇所は、張生が鶯鶯に近づくために、高僧の法本にお寺の部屋を借りようとする時に歌う曲文の「借与我半間兒客舍僧房、与我那可憎才居止処門兒相向。（私の可愛い意中の人人が住んでいる処に向かう部屋であれば、どれでもいいが、貸して頂きたい。）」（第二齣「粉蝶兒」曲）や鶯鶯が張生を科挙に送り出す際に歌う曲文の「聽得一声去也松了金釧、遙望見十里長亭減了玉肌。（行ってくると聞き、やつれ

13) 『焚書』卷三「童心説」を参照。なお、李卓吾本人は『西廂記』に関する評価を残したとはいえ、「はじめに」で述べたように、『初刻五種伝奇』における批評にどれぐらい李卓吾本人によるものがあるのかは定かでない。

て金の釧が緩くなり、十里先にある長亭を見て玉肌が損なわれた。)」(第十五齣「滾繡球」曲)のような張生と鶯鶯が恋し合う言動が多い。このほか、紅娘の口を借りて張生と鶯鶯の恋における喜怒哀樂を表現する言葉に付されている「妙」も一部ある。例えば、恋わずらいに躍った張生を見舞うよう鶯鶯に言われた召使いの紅娘が歌う曲文の「俺小姐至今胭粉未曾施、念到有一千番張殿試(お嬢様は今になつてもおしろいを塗つておらず、張様のことを千回口にしました。)」(第九齣「元和令」曲)がそれである¹⁴⁾。

一方、第十四齣では、張生と鶯鶯の密会が暴露され、紅娘が崔夫人に問い合わせられる場面が描かれている。そこで、「小賤人、為甚麼不跪下。備知罪麼(このあまめ、なぜ跪かないの。おまえは自分の罪を知っているの。)」という崔夫人の訊問に対し、紅娘は「紅娘不知罪(紅娘は知りません。)」と言い返した。さらに、紅娘は知恵を働かせ、「他道紅娘備且先行、教小姐權時落後(彼は「紅娘は先に行きなさい」と言い、お嬢様を残しました。)」と自分の密会への関与を否定しようとした。それでも密会の責任を負わされそうになったところ、紅娘は「非是紅娘之罪、亦非張生小姐之罪、乃夫人之過也。(これは紅娘の罪ではなく、張生、お嬢様の罪でもなく、夫人の過ちなのです。)」と堂々と崔夫人を批判した。以上の紅娘の発言にそれぞれ「妙」が付されているが、張生と鶯鶯の恋を成就させる視点で「妙」が付されたというよりは、強権に屈することなく勇敢に対抗する描写を批評するために「妙」が付されたと考えたほうが自然であろう。このほか、物語の終盤で鄭恒が鶯鶯を横取りするために、張生は既に都尚書の娘と結婚したと嘘をつき、崔夫人と紅娘を信じ込ませた後、帰ってきた張生に紅娘が不満をぶつけた科白「為備別做了女婿、俺小姐依旧嫁了鄭恒也。(あなたが別の家の婿になったため、お嬢様はもと通り鄭恒に嫁いでしまった。)」に「妙」が付されているのも紅娘の率直な性格を讃える

14) こここの「妙」は「念到有一千番張殿試」に付されている。

ものだと考えられる。

二文字の「妙妙」は「妙」と同様、ほとんどが張生と鶯鶯の恋愛感情を直接的、または間接的に描く内容に付されているが、第十九齣では、紅娘が横暴な鄭恒を罵る「趨射、発村、使狼。(この出過ぎ者、理不尽な振る舞いをしてひどいことをした。)」という曲文に対し「妙妙」が付されている¹⁵⁾。これもまた紅娘が凶暴を恐れず、目上の人の非に対しても率直に物を言う性格を讃えるものだと考えられる。

紅娘本人を批評する「妙」以外に、情景の描写を批評する「妙」も存在する。第十六齣では、張生の夢の中で鶯鶯を捕らえに来た兵士と鶯鶯のやりとりに対し(「水仙子」曲)¹⁶⁾、眉欄には「妙妙、逼真夢里光景。(素晴らしい。真に迫る夢の中の情景である。)」が付されている。

このように、『西廂記』における「妙」は『琵琶記』『紅払記』と同様、男女の恋愛感情という主題に関わる内容に「妙」が大量に付されているものの、それ以外の表現にも「妙」と批評されている例が複数ある。

六、容本『水滸』における「妙」

『初刻五種伝奇』のほかに、容与堂によって刊行されたもう一つの作品は「四大奇書」の一つとして知られる『水滸伝』である。いわゆる「才子佳人」の要素が濃厚である『初刻五種伝奇』に対し、宋江ら百八人の豪傑

15) こここの「妙妙」は少しの間隔を空けて付されているが、一応一つの評語として見なすことにする。第三齣「小桃紅」曲の後ろに続く紅娘の科白、第十二齣「紫花児序」曲、第十八齣「醉春風」曲、「五煞」曲に付されている「妙妙」も同様である。

16) 原文は「〔卒云〕 倘是誰家女子、夤夜渡河。〔鶯云〕 倘休胡說。〔鶯唱〕 杜將軍倘知道他是英杰。瞓一瞓着倘為了醯醬、指一指化做醬血。騎着一疋白馬來也。〔〔兵士は言う〕 あなたはどこのお嬢さんですか。なぜ深夜に河を渡ったのですか。〔鶯鶯は言う〕 でたらめなことを言わないでください。〔鶯鶯は歌う〕 杜將軍が英傑であることはご存知ですよね。彼の目に留まると、ずたずたにされてしまい、彼が命令を下すと、血だまりしか残りません。杜將軍は白馬に乗ってやってきました。〕」である。なお、圈点は「杜將軍…白馬來也」に付されている。

の武勇伝を語る『水滸伝』は男女の情愛に関する描写が全くないわけではないが、ごく一部に限られる。同書の中で、「妙」はどのような内容に付されているのだろうか。

筆者が調べたところ、容本『水滸』における「妙」は主に四つに分類することができる。

一つ目は登場人物の英雄豪傑の一面を表す言動に付されている。例えば、第二回では、朱武と楊春は史進に捕えられた陳達を救出するために、全員投獄される危険を冒して苦肉の策を実行した¹⁷⁾。

史進便道、「爾兩個且跟我進來。」朱武、楊春並無懼怯、隨了史進直到後序前跪下、又教史進綁縛。史進三回五次叫起來、那兩個那裏肯起來。惺惺惜惺惺、好漢識好漢。史進道、「爾們既然如此義氣深重、我若送了爾們、不是好漢。我放陳達還爾如何。」朱武道、「休得連累了英雄、不當穩便。寧可把我們去解官請賞。」史進道、「如何使得。爾肯吃我酒食麼。」朱武道、「一死尚然不懼、何況酒肉乎。」

そこで、史進は「おまえら二人はとりあえず俺について入って来い。」と言った。朱武、楊春は全く怯えることなく、史進について奥の間に来て土下座をし、史進に縛ってくれと頼んだ。史進は何度も立ってくれと言ったが、二人は全く立ちあがめようとしなかった。賢者は賢者を愛おしみ、英雄は英雄を知る。史進は、「貴方たちがこれほど信義に篤いからには、俺が貴方たちを役所に連れて行ったら、好漢ではなくなる。陳達を返してやろうか。」と言った。朱武は、「貴方様を巻き添えにしたら、よくありません。いっそのこと、俺ら三人を役所に突き出し、報奨をもらってください。」と言った。史進が、「それはいけない。俺の酒と飯を食べる気があるか。」と尋ねると、朱武は、「死ぬこ

17) 『李卓吾批評忠義水滸伝』（中国国家図書館蔵同書の影印本、上海古籍出版社、1991）を用いる。

とすら怖くないのですから、酒と飯ぐらいは何でもありません。」と言った。

下線部のところは朱武と楊春が仲間を救出するために、危険にさらされても怯えない姿が描かれており、それぞれ「妙」が付されている¹⁸⁾。このような「妙」は武松や魯智深などが悪人を懲らしめる場面にも多く付されている。

二つ目は登場人物が知恵を働かせ、目標を達成しようとする言動に付されている。例えば、第十六回では、呉用らが棗売りと酒売りに扮し、宰相の蔡京への誕生祝いを横取りする話が見られる。

楊志喝道、「爾等是甚麼人。」那七人道、「爾是甚麼人。」楊志又問道、「爾等莫不是歹人。」那七人道、「爾顛倒問、我等是小本經紀、那里有錢与爾。」

楊志が、「貴様らは何者だ」と怒鳴ると、七人は、「貴様こそ何者だ」と言った。楊志がさらに「貴様らは悪党だろう。」と問い合わせると、七人は、「こっちこそ聞きたいわ。我々は小商いをやっていて、貴様にやる金がどこにあるのか。」と返した。

ここの下線部の会話だけでなく、後に呉用らが誕生祝いを護送する楊志らの警戒心をさらに解き、しひれ薬が入っている酒を飲ませるために行った会話にも複数の「妙」が付されている。このような「妙」は梁山泊の好漢たちが仲間に引き入れたいと考える人物に、計略を使ったり、勧誘したりする場面や、戦いを有利にするために、計略を使うなどの場面にも多く付されている。一方、閻婆が宋江を騙して役所に行くよう仕向ける内容（第

18) 容本『水滸』の引用では、特に説明がない限り、下線部にもともと圈点（○）が付されている。

二十一回)、王婆が西門慶に潘金蓮を落とす策を教える言葉(第二十四回)、西門慶が巧みな話術で潘金蓮を誘惑する言葉(同回)、裴如海が潘巧雲に密会を誘う言葉(第四十五回)、潘巧雲が嘘の話を楊雄に言って石秀を陥れる言葉(同回)、晁蓋が曾頭市を攻略する時に、曾頭市側から遣わされた和尚が晁蓋の疑いを消すために述べた言葉(第六十回)、李固、賈氏が盧俊義に罪を認めさせようとして発した言葉(第六十二回)、薛霸が盧俊義を確実に殺すために、木に縛りつける前に掛けた言葉(同回)、盧俊義の殺害を画策する蔡京、童貫が盧を都に呼び寄せるために、皇帝に上奏する言葉(第百回)にそれぞれ「妙」が付されていることから、二つ目の「妙」は必ずしも英雄豪傑に限定されておらず、むしろ相当数が悪人の企みを批評している¹⁹⁾。また、それらの「目標」と「戦い」は必ずしも正義であるわけではない。

三つ目は登場人物の決まりや習慣に囚われない、素直な言動に付されている。その代表的な人物は李逵である。例えば、第三十八回では、宋江から借りた銀を博打で負けて全て失った李逵は胴元から銀を奪い返そうとした。

李逵也不答應他、便就地下擄了銀子、又搶了別人賭的十來兩銀子、都摟在布衫兜里、睜起双眼說道、「老爺閑常賭直、今日權且不直一遍。」李逵は彼(胴元)に返事もせず、地べたから銀を攫い、ほかの人が賭けていた十数両の銀も奪い取り、上衣の隠しに包んで両眼を剥き出し、「俺様は普段素直に打つが、今日はひとまず素直にはやらん。」と言つた。

19) 容本『水滸』では、巻首に付される「梁山泊一百單八人優劣」を含め、宋江、呉用を貶す批評(いわゆる強盗扱い)が見られるが、「妙」が付される箇所を見ると、必ずしも宋江、呉用を悪人として扱っているわけではない。

上の下線部に「妙」が付されている。また、第六十七回では、宋江が盧俊義を梁山泊の主に推したところ、李達が猛反対し、「今朝都沒事了、哥哥便做皇帝、教盧員外做丞相、我們都做大官、殺去東京、奪了鳥位子、却不強似在這里鳥乱。（今はもう方が付いたのだから、兄貴が皇帝になり、盧員外に宰相をさせ、俺らは大官になり、東京へ押し寄せてくそ皇帝の位を奪った方が、ここでくそ騒ぐよりもう。）」と叫んだ。下線部に「李大哥說話一毫不計較、所以為妙。（李兄貴は話す時、全くはかりにかけないため、素晴らしい。）」が付されている。同回で、李達は一人でこっそり凌州へ行き、手柄を立てようとした。途中腹が減ったが、お金を梁山泊に忘れたため、ただ食いをした場面に対しても、眉批として「妙人、妙人。李大哥妙處只在一言一動都不算計、只是任天而行、率性而動（素晴らしい人。李兄貴の素晴らしいはただ全ての言動に計算が入っておらず、ひたすら成り行きに任せて行動し、本性に任せて動くところにある。）」が付されている。

李達のほかに、第四十四回では、梁山泊の奸漢たちが李達の母親が虎に食べられたことを聞き、大笑いをした箇所に対し、眉批として「他的娘被老虎吃了、倒都大笑起来、絕無一些道學氣、妙妙。（彼の母親が虎に食われてしまったが、皆逆に大笑いをし始め、全く道学者然としていることがなく、素晴らしい。）」が付されている。

以上の例が示すように、三つ目の「妙」が付されている箇所は英雄豪傑の言動とは程遠いが、批評者から見ると、いずれも人間としての素の部分を見せる表現であるため、素晴らしいを感じていると考えられる。

四つ目の「妙」は素晴らしい描写に付されている。例えば、第二十三回では、武松が虎を打つ場面に次のような描写がある。

那箇大虫又飢又渴、把兩隻爪在地下略按一按、和身望上一撲、從半空

裏擣将下來。

あの虎は飢えており、喉も渴いている。二つの足で地面を少しかくと、体ごと上へ跳び、空から飛び降りてきた。

下線部に対し、眉欄には「又画虎矣、妙絶妙絶（また虎が生きているかのように描かれている。絶妙である。）」とある。また、第七十二回では、宋江が朝廷に帰順するために、柴進らと都に潜入したことが語られている。そこで、「正是、楼台上下火照火、車馬往来人看人。（楼台の上も下も火は火を照らし、車馬は行き来して人は人を見る。）」という繁華な街の景色を描く一句に「妙」が付されている。四つ目の「妙」は第二十三回の武松が虎を打つ場面と上の第七十二回の引用以外は、ほとんど見られず、四種類の「妙」の中で最も数が少ないが、「妙」が多岐にわたる視点で付されている明証となっている。このように、「英雄譚」が作品の中心となる『水滸伝』における「妙」は英雄たちが知恵や武勇で悪人を懲らしめる描写や忠義を尽くす描写に多く付されているが、こういった「英雄」的な描写以外にも、英雄たちのわがままな振る舞いや悪人の言動にまで付されているという多様性は、『初刻五種伝奇』の中で、「才子佳人の恋愛感情」に関わる描写以外の内容にも「妙」が比較的に多く付されている『西廂記』『琵琶記』『紅払記』からも強く感じられる。

上記の作品における「妙」は共通点があるとはいえ、様々な内容に付されているため、統一性を失っているとも言える。この問題は『初刻五種伝奇』と容本『水滸』における「画」との比較を通してさらにはっきりと見て取れる。

七、「妙」と「画」の使用基準について

まず、『初刻五種伝奇』における「画」を見てみよう。

「画」の数が最も多い『西廂記』では、同書の第十齣の総批に「至如相思情状、無形無象、『西廂記』画來的逼真、躍躍欲有。…千古來第一神物、千古來第一神物。(相思の情状に至ると、形も様子もないが、『西廂記』はそれを真に迫り、目に浮かぶように描いた。…千古以來の第一の神物である。)」とあるように、主に「相思情状」に関する素晴らしい描写に付されている。

勿論、例外もいくつか確認できる。『西廂記』第十四齣では、歓郎が崔夫人と紅娘の質問に答える科白「前日晚夕、奶奶睡了、我見姐姐和紅娘燒香、半晌不回来、我家去睡了。(前日の夜、奥様が寝た後、お姉様と紅娘が線香をあげるに行ったのを見ましたが、しばらく経っても帰らなかつたので、僕は部屋に戻って寝ました。)」「奶奶知道爾和姐姐去花園里去、如今要打着問你哩。(奥様は君とお姉様が花園に行ったのを知り、今君を拷問しようとしているよ。)」にそれぞれ「画」が付されており、第十九齣では、紅娘が鄭恒に孫飛虎がお寺を包囲して鶯鶯を強奪しようとしたことを教える時に歌う「天淨沙」曲の「手横着双刃高叫道要鶯鶯做压寨夫人。(両手に刀を持って大声で鶯鶯が山賊の妻にされてしまうと叫んだ。)」にも「画」が付されている。

以上の三例を除けば、全ての「画」が張生と鶯鶯の恋をめぐる喜怒哀樂に関わる表現に付されている。『西廂記』では「画 (画面を含む)」は二十二例、「相思画 (相思の絵)」「一幅相思画 (一枚の相思の絵)」「画面、画亦不到此。(生き生きとしている。絵でもここまで表現できない。)」「嬌態如画、妙妙。(艶かしい姿は絵のように見える。素晴らしい。)」はそれぞ

れ一例で、合計二十六のうち、二十三例の「画」は主役、そして主役の恋愛感情と関わりのある箇所に付されている。

『紅払記』と『琵琶記』における「画（画画を含む）」はそれぞれ二例ある。前者はそれぞれ徐徳言と離れ離れになった楽昌公主の気持ちと、楽昌公主と再び一緒になった徐徳言の気持ち（第三齣「一翦梅」曲、第二十六齣「解三醒」曲）に付されており、後者は蔡伯喈が板挟みになった自身の境遇を嘆く曲文と妻の趙五娘を想う曲文（ともに第二十四齣の「雁魚錦」曲）に付されている。『西廂記』と比べると、例がかなり少ないが、やはり主役か準主役、そして主に恋愛感情と関わりのある描写に付されている。

『玉合記』において、三例の「画（画画を含む）」（第七齣「西地錦」曲の後ろに続く「天仙子」、第十七齣「駐雲飛」曲、第二十九齣「隔尾」曲）と第二節に引用した「如画」「喜処、驚処、恨処、種種画出。」（第七齣）はいずれも柳氏と韓翃の相手に対する思いを表す言動を批評しているが、「画出傷春情態（春になると、感傷的になる情態が描き出されている）」（第三齣「祝英台近」曲の後ろに続く柳氏の科白）、「画出嬌態（艶かしい姿が描き出されている）」（第七齣「太師引」曲の後ろに続く柳氏の科白）、「何物文人刻画到此。（どのような文人がここまで描けるのか。）」（第二十九齣「前腔（二郎神）」曲）という「画」と関わりのある三つの眉批は韓翃を想う感情表現ではなく、柳氏自身の感情表現に付されている。

『幽闇記』における「画」の使用は以上の四つの作品と明らかに異なるところがある。同書では、「画画」が一例、「如画（絵のようである）」が二例、「画出嬌模様（艶めかしい姿が描き出されている）」「両三語画出嬌態如見（二、三語で目に浮かぶような艶かしい姿が描き出された）」「画出一个嬌態（艶かしい姿が描き出された）」「如此等曲都似画矣（このような類の曲は皆絵のようである）」「画出庸医模様（藪医者の姿が描き出されている）」がそれぞれ一例ある。

そのうち、恋愛感情に関する描写とは全く関係がない内容を批評している例は六つである。「画出嬌模様」（第八齣「朱奴兒」曲）、「両三語画出嬌態如見」（第十齣「東風第一枝」曲の後に付く王瑞蘭の科白）、「画画」（第十三齣の「攤破地錦花」曲の王瑞蘭の歌詞）、「画出一个嬌態」（同齣同曲の王瑞蘭と母親の合唱する部分）はいずれも豊かな環境で育てられてきた王瑞蘭の天真でか弱い姿に対する描写を評価する「画」である。また、「如此等曲都似画矣」と「画出庸医模様」はそれぞれ蔣瑞蓮が王瑞蘭の母親と一緒に避難する途中で見た景色、翁太医の藪医者らしい発言を批評している。

『初刻五種伝奇』における「画」の特徴をまとめると、『西廂記』『琵琶記』『紅払記』『玉合記』における「画」は主に主役か準主役の言動に付されており、「画」が付されている内容の割合からすると、前三者は男女の恋愛感情に関する表現を批評する傾向が強い。これに対し、『幽閨記』における「画」が付されている内容の多くは恋愛感情に関する描写とは全く無関係である。

一方、容本『水滸』における「画」について、川島氏は次のように述べている²⁰⁾。

「画」は描写のすばらしさ、それもリアルな人物描写を評価する語であるものの、主人公である英雄たちの勇ましい描写には見られず、脇役である小人物たちの描写に対して付される明らかな傾向が窺えた。それは、人間らしい欲望や感情が、小人物の描写にこそ表れていることを意味している。とりわけ「淫婦」とそれをめぐる人々の物語に際立って多く用いられていることは、「李卓吾」が『水滸伝』の本質的な価値を、彼女たちの描写に認めていたことの表れであろう。

20) 前掲注（5）論文。

『西廂記』における歓郎や孫飛虎を批評する「画」や『幽閨記』における翁太医を批評する「画」は『水滸伝』における「画」の使用と一致するが、同氏の指摘によれば、『初刻五種伝奇』、少なくとも『西廂記』の本質的な価値は男女の恋愛感情に関する描写にあるということになる。そうすると、同様に男女の恋愛感情に付されている「妙」と「画」には、どのような違いがあるのかという疑問が生じてくる。

同氏は「第二十一回に登場する宋江、第二十四回～二十五回に登場する武松も、こうした淫婦たちとのやりとりの中では『画』が散見されるものの、他の回において、彼らの英雄然とした描写に『画』が付けられることはない。」と指摘しており²¹⁾、「画」を付けるかどうかは内容による影響も大きいと考えられる。そこで、「画」と前節に挙げた人間らしい欲望や感情にもしばしば付されている三つ目の「妙」にはどのような違いがあるのかも検討しなければならない。

前述の潘巧雲が嘘の話を楊雄に言って石秀を陥れようとする場面（第四十五回）の具体的な描写を挙げよう。

楊雄又問道、「石秀兄弟這幾日不曾和他快活吃得三杯、備家裏也自安排些請他。」那婦人也不應、自坐在踏床上、眼淚汪汪、口裏嘆氣。…
 【那婦人掩着淚眼只不應】。楊雄連問了幾聲、【那婦人掩著臉仮哭】。…
 那婦人一頭哭、一面口裏說道、「我爺娘当初把我嫁王押司、只指望一竹竿打到底、不想半路相拋。【今日嫁得備十分豪傑】、却又是好漢、誰想備不與我做主。」…那婦人道、「我本待不說、【却又怕備着他道兒】。欲待說來、又怕備忍氣。」…那婦人道、「【我說與備、備不要氣苦】。自

21) さらに、前掲注（5）論文では、この一文に対する注に「たとえば武松については第二十三回や第三十一回にも『画』が付けられているが、酔って酒屋に絡む台詞、虎を倒してへとへとになった姿等、英雄とはほど遠い、本音ともいいうべき部分が表れている描写に対するものである。その他、たとえば魯智深、林沖、宋江、李逵等の描写についても同様の傾向が窺える。」とある。

従爾認義了這個石秀家來、初時也好、向後看看放出刺來。見爾不帰時、如常看了我、說道、『哥哥今日又不來、嫂嫂自睡、也好冷落。』我只不采他、不是一日了。這個且休說。昨日早晨、我在厨下洗脖頸、這廝從後走出来、看見沒人、從背後伸隻手來摸我胸前道、『嫂嫂、爾有孕也無。』被我打脫了手。本待要聲張起來、又怕鄰舍得知咲話、裝爾的望子。巴得爾歸來、却又濫泥也似醉了、又不敢說。我恨不得吃了他、爾兀自來問石秀兄弟怎的。』

楊雄はさらに、「この何日か石秀くんと楽しく飲んでいないので、うちでも酒食を用意してご馳走しようか。」と尋ねた。あの婦人はそれに応じず、腰掛に座ったまま、目に涙をためてため息をついた。…あの婦人は涙を押さえながら、まったく応じようとしなかった。楊雄はしきりに何度も聞いたが、あの婦人は顔を覆って嘘泣きをしていた。…あの婦人は泣きながら、口で「両親が最初私を王押司に嫁がせ、とも白髪まで添い遂げることを望んでいたのに、思い掛けず途中で置いてきぼりにされてしまった。今はとても豪傑らしい好漢のあなたに嫁いだのに、私を庇ってくれないなんて思わなかった。」と言った。…あの婦人は「私は黙っておこうと思ったけれど、あなたがあいつの罠にはまるのが心配。言えば言ったで、あなたがむしゃくしゃするのが心配。」と言った。…あの婦人は、「お話しするので、怒らないでね。あなたがあの石秀と義兄弟の契りを結んで家に泊らせてから、はじめはよかったですけど、後になってどんどんちょっかいを出すようになった。あなたが帰らない時は、いつも私を見て、『兄さんは今日も帰らない、姉さんは一人で寝るのは随分寂しいでしょう。』と言う。私はそれを無視しているけれど、一日だけじゃないの。それはさておき、昨日の朝、私が台所で首筋を洗っている時、あいつが後ろから出てきて、人がいないのを見ると、背後から手を伸ばして、私の胸を触り、

『姉さん、妊娠しているの。』と聞いた。私はぱっと振り解いた。大声を立てようとしたけれど、近所に知られて笑いものになり、あなたに恥をかかせることが怖かった。お帰りを待ち兼ねていたのに、またぐでんぐでんに酔い潰れてしまっていたので、言えなかった。私はあいつを食い殺してやりたいほどなのに、あなたはまだ石秀くんはどうしていると聞くのね。』と言った。

ここでは、隅付き括弧（[]）で囲んだ箇所に五つ、それぞれ「画」が、下線を付した箇所に九つ、それぞれ「妙」が付されている²²⁾。また眉欄には「淫婦奸状、千古如見。（淫婦の悪賢い様子は、長い年月が経っても目に浮かぶ。）」「天下有如此妙手、活活画出一箇淫婦人来（天下にこれほど上手い書き手がいるとは、生き生きと一人の淫婦を描き出した。）」とある。眉批を読むと、批評者は潘巧雲の「奸状」に対する真に迫る描写を高く評価していることが分かるが、行間に付されている「妙」と「画」はどちらも潘巧雲の行動と言葉両方を批評しており、使い分けがはっきりしない。このように、「妙」と「画」の使い分けの基準が判断しにくい箇所は淫婦に関する描写以外にも存在する。第三十八回における李逵に関する描写を見てみよう。

李逵看着宋江、問戴宗道、「哥哥、這黑漢子是誰。」…李逵便道、「我問大哥、怎地是龜齒。」…李逵道、「若真個是宋公明、我便下拜、若是閑人、我却拜甚鳥。節級哥哥不要瞞我拜了、備却笑我。」宋江便道、「我正是山東黑宋江。」李逵拍手叫道、「【我那爺】、備何不早說些個、也教鐵牛歡喜。」撲翻身駆便拜。

22) この一段落では、最初の楊雄の言動と「那婦人道」「自從備認義了這個石秀家來」を除き、すべて圈点（○）が付されている。隅付き括弧で囲んだ部分と下線部はあくまでそれぞれの批評と最も緊密な関係を有する箇所である。

李達は宋江を見ながら、戴宗に「兄貴、この色黒の男は誰だ。」と聞いた。…すると、李達は「兄貴に聞くが、どこが荒っぽいんだ。」と言った。…李達は「もし本当に宋公明なら、拝礼するが、もし無関係な人間なら、くそ野郎に拝礼なんてするもんかい。節級の兄貴、俺を騙して平伏させてから、笑ったりしないでくれよ。」と言った。すると、宋江は「私こそ山東の黒宋江です。」と言った。李達は手を打って「俺の大兄貴、なぜもう少し早く言って、この鉄牛を喜ばせてくれなかったのか。」と叫び、身を伏せて拝礼した。

戴宗の紹介によって宋江と初対面した李達は宋江を知らなかったため、乱暴な態度で対応したが、目の前の人人が本当に宋江だと知った後、きわめて恭しい態度に変わった場面が描かれている。そこで、下線部にそれぞれ「妙」が付されており、隅付き括弧で囲んだ「我那爺」に「画」が付されている。さらに「節級哥哥不要瞞我拝了、爾却笑我」に「巧妙」が付されているが、「妙」「画」とはそれぞれどのような基準で使い分けがされているのか判別し難い。第一回の回批に「『水滸伝』事節都是仮的、説来却似逼真、所以為妙。(『水滸伝』の話は全て虚構であるが、まるで事実のように語られているため、素晴らしい。)」とあるように、リアルな描写に「妙」が付されることも考えられるため、「妙」と「画」は独自の使用傾向が大まかに擱めるものの、やはり重なる部分も多々ある。

『初刻五種伝奇』においては、『幽閨記』以外の四つの作品（特に『西廂記』）における「画」は脇役である小人物の描写に目を向けているものの、男女の恋愛感情に関する描写に付されるという「妙」と同じ傾向が見受けられる。しかし、「妙」「画」が同時に付されている箇所とその一方しか付されていない箇所を見比べても、恋愛感情に関する描写に付される場合の両者の違いがはっきりしない。

『初刻五種伝奇』と容本『水滸』を通して考察してきた結果、「妙」と「画」は作品によってそれぞれ注目する内容に差が出るが、同じ作品においては混用されていることが少なくないことがわかった。

おわりに

錢希言の『戯瑕』や周亮工の『因樹屋書影』の記述によると、葉昼という人は李卓吾の名を借りて一連の戯曲や小説に批評を付けたことがあるという。そのため、本稿で取り上げた容与堂刊のこれらの作品はしばしば葉昼が批評を受けたと見なされている²³⁾。批評者問題については、諸説があり、未だ定説がないが、『初刻五種伝奇』と容本『水滸』において、「妙」は数が多い作品ほど、様々な種類の描写に付される傾向が強く、さらに、それぞれ『初刻五種伝奇』と容本『水滸』に「妙」と「画」が付されている箇所を比較すると、両者の区別が明確につかないことが多いため、これらの六つの作品における批評が同一人物の手によるものであれば、「妙」と「画」の区別をはっきりと意識することなく所々に評語を付けたのではないかと思われる。

そもそも『琵琶記』第二十七齣「鐘錠児」曲の後に付く張太公と趙五娘の科白に「凡白用説話方妙、詩句可厭。(凡そ科白は話し言葉を使用して初めて素晴らしいが、詩句を使うなら不快である。)」と付されているが、第三齣では、牛府の下僕の口から牛氏の天真爛漫さを紹介する科白の「他是玉皇殿前掌書仙、一点塵心謫九天。莫怪蘭香熏透骨、霞衣曾惹御炉煙。(彼女はもともと天庭の掌書の仙女、いささかの塵心で天より追放された。怪しむこと勿れ、蘭の香りが骨まで沁み透り、その華やかで美しい

23) 例えば、黄霖「論容与堂本『李卓吾先生批評北西廂記』」(『復旦学報(社会科学版)』2002年第2期、復旦学報(社会科学版)編集部)では、『西廂記』における批評は葉昼の手によるものとしている。

服はかつて天帝の香炉の煙を纏っていたことを。)」という韻文形式の表現にまで圈点が付され、この一段落の最後に夾批の形で「白妙甚、今人不能及矣。(科白は甚だ素晴らしい、今の人には及ぶことができないのである。)」とあることから、同一作品の中で、批評の基準のずれが窺える。ここまで見てきた「妙」と「画」の使用基準の不統一を踏まえて考えると、容与堂刊のこれらの作品における批評は複数の手によるものである可能性が高いだろう。

前述したように、李卓吾本人は特に『西廂記』『水滸伝』を高く評価したことがある。李氏の観点をアピールするためには、素晴らしい描写を批評する「妙」や「画」などの簡単な評語を多く入れるのが最も経済的な方法であり、「妙」の視点の広がりや「妙」と「画」の使用基準の違いがはつきりと区別できない例が多く存在する理由はそこにあるかもしれない。

なお、筆者がのちに刊行された『三刻五種伝奇』における評語の考察を行ったところ、最も使われている批評は「妙」ではなく、「好」であり、両者の数にはおよそ三倍の差があった。『三刻五種伝奇』の批評には、批評者のどのような考えが反映されているのか、『初刻五種伝奇』と共に通するところがあるのかについては、稿を改めて述べたい。

※ 本研究はJSPS科研費21K12943の助成を受けたものである。